

棚田学会通信

第23号 2007年10月25日

発行/棚田学会

〒184-8577 東京都小金井市本町6-5-3
(ふるさときやらばん内)

TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



宮崎県日之影町戸川の棚田

- ◆会長就任にあたって.....早稲田大学名誉教授 中島 峰広2
- ◆副会長就任にあたって.....早稲田大学文学学術院教授 海老澤 衷
- ◆会員通信3
 - 第17回現地見学会・シンポジウム「嫉捨棚田」に参加して…(独)緑資源機構 杉山 行男
 - 棚田の起源は紀の川市.....和歌山県紀の川市理事・農林商工部長 田中 卓二
 - 第13回棚田サミット参加者の視点—サミットへの関わり方が問われた茂木大会—
.....東京都江戸川区在住 伊東 春海
- ◆日本の棚田百選紹介6
 - 宮崎県日之影町戸川の棚田.....日之影町長 津隈 一成
- ◆てらす倶楽部7
 - 国際農業ジャーナリスト連盟日本大会を終えて
 - IFAJ 日本大会実行委員会事務局次長(フリーランス・ジャーナリスト).....村田 正
- ◆書籍紹介8
 - 早田清美写真集「千町(せんじょう)棚田50年1955/2005」.....中島 峰広

事務局ニュース

- 棚田学会賞基金募金者の紹介・募金のお祝い ● 棚田学会誌9号への投稿、棚田学会賞募集について ● 平成19年度棚田学会活動計画、平成19年度収支予算編集後記

会長就任にあたって

早稲田大学名誉教授 中島 峰広

棚田学会の三代目会長就任に当たって、まずなすべきことは先の二人の会長が在任中に亡くなっているの、任期を全うすることだと思った。これをなさなければ四代目の会長を引き受ける人はいないであろうと真剣に心配したからです。

そこで、任期を全うするに当たっては、棚田学会が持つ二つの特長、すなわちアカデミズムに傾倒することなく、誰もが自由に入会できるオープンな学会であることと、研究対象である棚田の保全を標榜することを堅持したいと考えています。

前者は、オープンな学会であることを示すように学会員の顔触れをみると、趣味の人、主婦、写真愛好家、演劇人や詩人、学校の教師、歴史学、民俗学、地理学、生物学、農学などの専門研究者、棚田のある自治体の職員、農水省や文部科学省などの中央省庁の職員、ジャーナリスト、学生などまさに職際的ともいえる幅広い領域の人びとから構成されています。したがって、特定の分野に偏るとか、特定の学閥によって牛耳られるという弊害もなく、和気藹々とした楽しい学会です。この雰囲気を楽しみたいと思っています。

後者は、研究対象を保全するという、その目的のために行動する学会であり、他の学会にはみられない特徴です。これまで棚田サミットを主催する全国棚田連絡協議会と連携して、農水省に対し中山間地域等直接支払制度の実現に向けて働きかけを行い、文化庁に対しては「文化的景観」の新設を促す要望書を提出しました。また、棚田学会賞を創設して棚田の保全に努める地域を励ます活動などを行ってきました。

しかしながら今後、棚田のある中山間地域では過疎・高齢化が一段と進み、棚田はもちろんのこと、棚田のある集落が限界集落となり消滅していくという、あってはならない状況がみられるようになると思われま。このような事態に対処すべく学会の力を結集して棚田保全の道を開きたいと考えております。

ご協力のほどよろしくお願い致します。

副会長就任にあたって

早稲田大学文学学術院教授 海老澤 哀

中島峰広先生が会長に就任され、従来中島先生が担当されていた仕事の一部を私が引き継ぐことになった。まずは10周年記念事業である。棚田学会は、1999年8月3日三越劇場で設立総会を開き、産声を上げた。したがって、2009年8月に満10歳となる。今から記念イベントを企画し、来年度の総会では実行案を示したいと考えている。多くの方からアイデアをお寄せいただければ幸いである。すでに、『10周年記念写真集』の刊行については石塚副会長の企画・編集のもと準備が進められており、その趣意書がお手元に届いていることと思う。推薦したい棚田の写真と1600字の文章をお願いするものである。心のこもった、そして棚田学会ならではの学際的な分析がなされた写真集を刊行したいものである。

私自身、思い出の多い棚田として、大分県豊後高田市大字田染平野の大曲地区を挙げる事ができる。棚田百選にも入っていないし、現在では水田耕作も行われていない。1980年、大分県の教育庁に勤務して間もなく、小さな谷あいに展開するこの地の棚田を訪れ、永和元(1375)年銘の優美な国東塔に魅せられて中世荘園の持つ文化的な価値に思いを馳せることになった。数年後、初代会長の石井進先生をこの地にご案内したところ、私の予想を超えて感動され、ついには私が撮った棚田写真が先生の著書『中世の村を歩く』(朝日選書648、2000年)の巻頭をカラーで飾ることになった。中世のムラを復原できる貴重なフィールドであったのである。ところで、この写真を改めて眺めてみると、撮影技術としては未熟なもので、棚田学会写真部(『雲南省元陽県の棚田』参照)のレベルには達していない。今から撮り直すこともできず、記念写真集刊行に向けて私自身悩んでいるが、このような悩みをお持ちの方は多いと思う。その際は早めに事務局にご相談を。

会員通信

第17回 現地見学会・シンポジウム

「姨捨棚田」に参加して

(独)緑資源機構 杉山 行男

今回の現地見学会は、平成11年に文化庁より名勝に指定された千曲市の姨捨棚田です。千曲市では平成17年度に新たに生まれた「重要文化的景観」の指定をめざし検討を行っており、第1日目はその検討の一環でもある「姨捨(田毎の月)」棚田シンポジウムと共同で開催され、地元からも約50名の参加を得て盛況なシンポジウムとなりました。

シンポジウムでは、中島学会長の「姨捨棚田の魅力」と、信州大学木村先生の「姨捨棚田の保全の流れ—名勝指定から重要文化的景観の選定へ—」の講演が行われました。引き続き、話題提供として地元の棚田保全に取り組んでおられる名月会渡邊すみ子、科野農業塾小松たつ子両氏から「姨捨棚田の耕作の苦勞と喜び」と題した報告、信州大学内川先生から保全活動に取り組んでいる4団体の活動のエリアと特徴についての報告があり、これらを受けて参加者の意見交換を行いました。

中島先生からは、①一望できる大規模な棚田、②棚田ばかりでなく善光寺平、千曲川、遠く北信五岳まで遠望できるなど景観構成要素の多様さ、③松尾芭蕉をはじめとする多くの文人・画家が注目した歴史的な棚田、④大池をはじめとする水利施設と水利秩序を持つ棚田等の姨捨棚田の特徴と魅力の紹介がありました。

木村先生からは、これまでの保全の取組の経過と、現在千曲市が中心となり検討を進めている重要文化的景観選定に向けての取組状況を、①県営ほ場整備事業、水と土保全モデル事業等の各種事業により保全のための整備を図ってきた、②平成11年に長楽寺、四十八枚田、姪石地区3haが棚田として初めて名勝に指定され、平成12年に保全管理計画を策定し、ゾーニングによる景観保全を図っている、③現在検討している文化的重要景観では、棚田を中心として産業遺産的な捉え方から、農道等の整備を行った棚田、ほ場整備を行った棚田、周辺のため池、林地、姨捨駅まで含んだ面的な広がりを持つ景観全体を対象として検討している、⑤課題としては、棚田は営農条件が厳しいため常に荒廃化の危機にさらされている、等を述べられました。

渡邊さんからは、冒頭に棚田学会賞を受賞した事への感謝と、このことが活動の励みになっていると

の報告があり、①荒廃化した棚田を復田し、オーナー制を12年間やってきた、②平成11年に名勝に指定され励みになると同時にプレッシャーもあった、③オーナーの方々が喜んでくれるとの思いが耕作を続けることにつながった、④雑草対策と畦畔の草刈りの大変さが課題、⑤地元小学5年生と中学2年生に食農教育の一環として農作業体験を指導したこと等の報告がありました。

小松さんからは、①科野農業塾はメンバー24人で楽しんで農業に取り組みながら地域農業の活性化を目的として活動、②玉ねぎ祭り等平地の農業で取り組んできた、③姨捨棚田の耕作は3年目、地元に住んでいながら棚田があることを知らなかった、④棚田の絶景に絶句し、やってみようとなった。仲間と行う活動なので作業は半日、後は慰労会やお茶のみ会、日常の管理は当番制等の報告をしていただいた。

信州大学内川先生からは、報告のあった2団体の他に四十八枚田保存会、県職員OBが中心となった田毎の月棚田保存会があり、それぞれの活動の内容や活動の場所等の比較、耕作放棄が徐々にではあるが減少傾向にあることの報告がありました。

会場からも、①除草剤の使用も適正な使い方をしていれば問題はない、②文学関係者も保全活動に巻き込んだら、③役場担当者のやる気が大事、等の活発な意見があり有意義な会となりました。

2日目は、予報と違って晴天に恵まれ、善光寺平を一望しながら、棚田の水源となっているため池や周辺の森林、日本3大車窓と言われるJR姨捨駅、芭蕉等多くの文人の歌碑のある長楽寺、棚田と盛りだくさんな内容と多彩な案内者に恵まれ、有意義な見学会となりました。

先ず信州大学岡野先生と土地改良区渡邊理事長の案内で、棚田の水源となっている弁財天の湧水、水源周辺の森林、大池・中池・下池のため池を見学、岡野先生より、①水源周辺はほとんどカラ松、杉、赤松、檜の人工林であるが、間伐等の適切な管理を行えば天然林と同様な水源機能は十分果たす、②降った雨がどれだけ貯留されるかは基本的には土壌の性質によって決まるので、土壌にあった樹種を植え適切に管理することが重要、③森林土壌は長い年月をかけて形成されるので開墾等の攪乱には弱い、④ため池と森林によって良好なビオトープが形成され、豊富な昆虫等が見られる、⑤棚田を守る事によって森林も守られる等の説明があり、渡邊理事長からは、①この水源は昔から大切に守られてきた。最近はお務の関係もあり役員だけとなったが、昔は農家全員

で9月に弁財天にお詣りをし感謝した。②今は水路が改修され漏水も少なくなったので問題はないが、昔は雨が少ない年は分水に双方の役員が出て調整するなどのいざこざもあった、等の話がありました。水源付近はあちこちから湧水があり、林の中を歩くと自然の心地よさ、豊かさを実感できました。

姨捨駅では、駅ホームから日本3大車窓の一つと言われている棚田の遠景を見ている時に、ちょうど普通列車と特急風林火山号がスイッチバックのホームに入ってきて一同感動ものでした。

棚田では、信州大学の馬場先生より法面は放置すればススキだけになってしまうが、刈り込みをすればチガヤが優勢となり、張り込みを頻繁に行えば野芝となり、見た目がきれいになるだけでなく、植物の種類も多くなり生物多様性の面からも優れているとの説明があり、実際に確認することが出来ました。

名月会の皆さんや四十八枚田保存会の宮坂会長の案内で、棚田での草刈りの大変さや、整備で管理がしやすくなった事などを聞きながら散策し、気持ちの良いひとときを過ごすことができました。

平地の何倍もの労力の掛かる棚田は、減反や米価の引き下げで農業としての役割だけでは成り立たなくなり、荒廃地化が進む中、景観や地域の保全、都会住民の農業体験の場としての役割等の農業以外の新たな価値を模索しながら保全の道を探っています。

今回の見学会では、棚田を地域の文化や伝統等の有機的な繋がりを持つ象徴として捉え、農家だけでなく地域全体で保全していくという視点が重要との感を強くしました。棚田保全の先導的な姨捨棚田が重要文化的景観に選定され地域一体となって活性化が進むことを祈らずにはられません。

最後に千曲市、信州大学及び学会事務局の皆様大変お世話になりましたこと、お礼を申し上げます。



姨捨棚田の水源を守る弁財天

棚田の起源は紀の川市

和歌山県紀の川市理事・農林商工部長

田中 卓二

「皆さんは大変な宝物をもっている。しかし、残念ながらそのことにお気づきになっていない。棚田の起源は紀の川市なのです。」

紀の川市の講演会場を埋め尽くした500人の聴衆は、中島峰広先生のこの言葉にハッ



としました。和歌山県下1位の農業生産を誇り、果物が生産の7割を占める紀の川市。「棚田」という言葉は知っていても、紀の川市が「棚田の起源」だったとは、という新鮮な驚きを覚えた人が多かったのではないのでしょうか。

中島先生が、「棚田」という言葉の由来を調べ始めたきっかけは、研究の対象物として「棚田」に取り組み始めた際の素朴な疑問からだったそうです。そこでたどり着いたのが、1406年の高野山文書の「僧快全学道衆堅義料田寄進状(そうかいぜんがくどうしゅうりゅうぎりょうでんきしんじょう)」という文献でした。その中に史上初めて「棚田」という言葉が現れ「安楽川(あらかわ)」という在所の東の方であるとされていました。中島先生は、この安楽川という地名を頼りに地名辞典をひもとき、紀の川市桃山町の元(もと)集落を2万5千分の1の地図で探し出しました。行動派の先生は、すぐさま地元の教育委員会に連絡をとり現地を訪ねることにしました。それが1998年のこと。残念ながら、そのときは「ここだ」という特定は出来なかったそうです。先生が見当をつけた場所は、丘陵地から沖積地にかけての桃畑なのですが、現地では話を聞くと1950年代までは水田だったとのことでした。同時に案内された善田(ぜんた)や黒川(くろかわ)という集落にある石積み棚田を見ても、おそらくこの地域一体が日本有数の棚田地域であったのではないかと考えたそうです。この顛末は、先生の名著「日本の棚田」の冒頭で詳しく紹介されているところです。

その後、東京学芸大学がこの地域の地籍図に小字境を描いた図面を作成したことがブレークスルー(突破口)となり、早稲田大学の海老沢教授の精力的な研究により、高野山文書にある「棚田」の場所を確定することが出来ました。元集落のはずれにある「オイノ池」の下の水田が、寄進状に出てくる日本では

じめて文献上記録された「棚田」であるというものです。「堅義(りゅうぎ)」というのは、学堂僧の討論会みたいなもので、その討論会の費用にするための「料田(りょうでん)」がこの棚田だったようです。棚田自体は、古墳時代からあったと考えられますが、文献上はじめて記載され場所が確定できたのはこの「棚田」しかありません。「文化財の「名勝」にも値する価値があるかもしれない。一度、文化庁の専門家に来てもらい判定してもらえば。」という先生のご提案も頂きました。

実は、講演会の前日、私も先生とご一緒に現地に行きました。しかし、「文献上日本最初の棚田」は、国道のバイパスが最近完成したことによりその下に埋まってしまい、その上のオイノ池も潰れてしまっていました。バイパス横の直壁の階段を降りたところ、「棚田」の末端にあたる場所にわずかながら段々の桃畑がありました。桃の袋がけをされている当地の農家の方にも話を聞くことが出来ましたが、かつ

て水田だった桃畑がそのように価値のある場所だということは全く知らなかったとのことでした。

この4月、私の農林水産省から紀の川市への出向が決まったとき、中島先生から「そこはまさに棚田がはじまったところだ。あんたよくそこに行ってくれたな」という言葉を頂きました。農地・水・環境保全向上対策調印式の記念式典という形で実現したこの講演会。紀の川市の持つ「宝物」の存在に、改めて私達が気づききっかけにすることが出来たと考えています。今後、この「文献上日本最初の棚田」については、文化庁への働きかけなど紀の川市でしっかりと調査を進めていきたいと思えます。

いつものことながら中島先生のご講演は聴衆の心を打つ面白さと感動があります。準備期間も少なく、公私お忙しい中、本当にありがとうございました。

棚田学会の皆さんも、「棚田の起源」紀の川市に、ぜひ一度おいでください。

第13回棚田サミット参加者の視点 サミットへの関わり方が 問われた茂木大会

東京都江戸川区在住 伊東 春海

はじめに

全国棚田(千枚田)サミットも、今回の茂木大会で13回を数え、喜ばしい限りである。サミットは千葉県鴨川市、岐阜県恵那市、佐賀県相知町(現唐津市)、それに栃木県茂木町の4回を通観し、感じたことを記してみた。参加者の立場であることから、表面的であることは否めない。そこは諸賢の知識と経験等で補っていただければ幸いである。

1. オープンセレモニー；開会式

棚田サミットのテーマソングに決まった「棚田へ行こう！」の子供達の合唱は、誠に素晴らしかった。ことに前開催地の日南市と、地元茂木町の子供達の棚田への熱い思いが、元気な歌声になって伝わってきた。棚田の将来へつながる頼もしい企画であったと言える。

2. 基調講演；栃木県知事

政策提言「広域連携で抜本的対策を！」につなげる意図は理解できるが、前3回までの基調講演と比較すると、心に響いてくるものがなかったことは残念と言わざるを得ない。栃木県の全国比較は、東京と100km圏内にあり、また東北地方につながるが故

に、交通網も充足され、世界遺産日光をはじめ多くの観光資源ありで、地の利と歴史的ストックに恵まれたればこそ、嘆きであったのだろうか。棚田の保全に腐心し、棚田を愛する人達の耳に意図は伝わったのであろうか。希望を言えば、主催地知事として、棚田を取り巻く農業や、環境保全に対する考えなどをもう少し聞かせてもらいたかった。

3. 県内の事例発表

(1) 宇都宮白楊高校生徒による棚田保全の取り組み

「棚田よ！地域と共に蘇れ！」の発表を聞いて、今まで若い人達を信じてきた思いに、間違いないことを見事に証明してくれた。ここの保全活動の凄さ、確かさは、地権者との交流にあったように思う。それによって、棚田や農業を取り巻く種々の問題を、直に知ることができ、このことが、活動全ての起爆剤になっていた。そして、一般の農業高校では取り組みにくい、棚田地形調査や生物自然調査、それに水田再生活動に棚田米新名物、森林間伐作業など、将来につながる活動まで展開できたことは、総合農業高校の特徴を活かしていた。彼らは棚田保全に暗雲を感じている多くの人達に、希望と勇気を与えてくれた。生徒と先生、それに地権者など地元の皆さんに、大きな万歳を贈りたい。

(2) 茂木町のむらづくりと棚田オーナー制度

農村レストラン「そばの里まぎの」の運営を中心にした報告。地域資源の特徴を生かしたむらづくりの一例として、大いに参考になった。

(3) 棚田の景観を守るために

国見地区の活動状況は「次世代への継承に可能性を開けそうなことをやってみる」というワークショップから出発し、棚田法面保護の緑化作業と調整池整備、さらには都市と農村交流にわたっていた。この報告まで聴いて、初めて人口19000人の一自治体だけでは、サミットの企画と運営は困難なことを知った。茂木町職員130人のうち、初日だけで100人が直接関わっていた。隣接的那須烏山市との共催の意味は大きい。

4. 政策提言

県境を越えた市町の共働で、イノシシ被害対策「広域連携で抜本的対策を！」は、里山を取り巻く問題として、棚田保全と同心円の関係にあり、日本の農林業の危機を象徴していた。テーマと言い、内容と言い、12市町職員の出演といい、今までにない楽しい企画であった。農家の甚大な被害を知るにつけ、問題の根幹は「山村の過疎化、高齢化による森林の荒廃、そしてこの荒廃がもたらす獣と人間の棲み分けの崩壊」にあるわけで、まさに棚田保全の困難、そのもののような思いがした。

5. 学校紹介

中川小学校の活動はテーマソング「棚田へ行こう！」を彷彿とさせるもので、生き生きとしていて

楽しく元気の出る活動報告であった。改めて大人が頑張らなければ、と痛感した次第。

まとめ「展望と発展」

(1) 棚田百選を順にサミットを開催してきたが、自治体の合併や財政状況の逼迫など困難な問題が山積している。その意味で茂木大会は1市1町の共催という、今後の展望を示唆したものであった。また、内容も県内、隣接県市町の共通問題を共有するという、かつてなかった試みもあり、サミット継続につながるものであった。それだけに棚田問題と離れたのは致し方ないと言えよう。さらなる特徴は、愛泉太鼓や河井ささらなど、子供達の活躍に眼を見張るものがあり、元気が出る楽しさに希望を感じた。

(2) ひとつ気になったことは、主催者側の一方的発信が多く、議論を深める機会が少なかったことである。棚田サミット開催の意義は、棚田保全に対する共通の問題を理解するだけでなく、困難を乗り越える知恵を出し合うことにもある。それは分科会が受け持っている。分科会の設営は主催者側だけでは難しく、専門的知識や経験者が必要である。その意味で棚田学会の係わり方が求められていたのではないだろうか。

最後に棚田サミット茂木大会関係者に、心からのお礼を申し上げます。

日本の棚田百選紹介

宮崎県日之影町戸川の棚田

日之影町長 津隈 一成

宮崎県日之影町戸川地区は、宮崎県の最北山間部に位置し、祖母・傾山系を源流とする日之影川沿いの山あいひっそりとたたずむ、戸数7戸の静かな集落です。

整然と積まれた石垣が、宅地、耕地、石蔵から防風垣にいたるまで、集落全体を形成しており、その美しい石組みから、「石垣の村」とも呼ばれています。

最古の石垣は嘉永年間(1848～1854)から安政年間(1854～1860)に築かれたとされており、故坂本寅太郎氏と故富士本嘉三郎氏の2名は、石工の技術を見込まれ、安政2年(1855)年の大地震で崩れた江戸城の修復工事に召されました。このとき、石垣工法の技術をさらに修得して帰郷し、集落の石垣を造ったと伝えられています。

畳一枚ほどの巨岩を樹木で作ったコロやテコを利用し、村人総出で築いたであろう巨大な石垣や小さな石を根気よく積み上げた見事な石垣は、宅地や耕

地造成、石蔵、防風垣など村全体を形成し、村とともに歴史を刻んできた、まさに村民7戸代々の芸術品であり、文化的遺産であります。

このように、長い歴史の中で築かれてきた日本の原風景ともいえる農山村の景観は、多方面から高い評価を受けており、平成11年「日本の棚田百選」に認定されました。

戸川地区には、大小合わせると104枚の棚田があり、総面積は4haを超えます。その中で、最も高い石垣は11mにも達し、耕地造成のために築かれた石垣では日本一の高さを誇ります。岩壁にそびえ立つその石垣は、城壁を思い描かせる角石と、武者返しとも思える見事な曲線美で構築されており、芸術的ともいえる苔むしたそのたたずまいに、往事の人々の石工としての素晴らしい感性を思わずにはられません。

ただ、ここで一番感嘆すべきは、その風貌ではありません。高さ11mの石垣で造成された耕地は、奥行きが7mに満たない狭小なものなのです。すなわち、猫の額ほどの耕地を造成するために、先人達がこの石垣を築き上げたその情熱にこそ感動を覚えて

止みません。区画整理され、大型の農耕機が推奨される現代において、この情熱に新鮮さを感じるとともに、絶えることなく後世に引き継がなければならないと考えております。

戸川地区では、平成3年に地区の全7戸で構成する「石垣の村管理組合」を設立し、棚田の保全はもちろん農道や水路に至るまで、組合員が共同して景観の維持・管理に努めています。また、戸川地区の豊かな自然や石垣の風景など、戸川固有の魅力を広く発信するため、平成12年から毎年4月に「石垣の村棚田まつり」を開催しています。

これら管理組合の取り組みは、多方面から高く評価されており、平成17年には「宮崎県地域づくり顕彰」を受賞しました。

戸川地区の農山村の豊かな自然、美しい景観、歴史、伝統文化等は、地域の誇りと生活の充実感を感じさせる源泉であり、地域の活性化を進める上での大きな要素です。

このため、今後とも地域住民が主体となって、地

▽戸川集落の風景



域固有の財産を見つめ直し、保存・継承していくとともに、都市部との交流による相互補完関係を構築し、交流人口の拡大を目的とした新たな取り組みにより、戸川地区の持つ自然や伝統文化の素晴らしさをアピールし、戸川地区の活性化を目指していきたいと思います。

てらす倶楽部

国際農業ジャーナリスト連盟 日本大会を終えて

IFAJ 日本大会実行委員会事務局次長 村田 正
(フリーランス・ジャーナリスト)

9月17日から23日にかけて、欧米を中心におよそ30カ国の食料、農業部門の記者、編集者、カメラマンなどを主なメンバーとする国際農業ジャーナリスト連盟（IFAJ）が、日本で世界大会、年次総会を開いた。大会、総会とは言うもののジャーナリストの集まりだけあって、主要なイベントは開催国の農業の取材だ。開催国にとっては自国の農業、伝統、文化などの情報を世界に発信するまたとない機会となる。総勢184人の海外農業ジャーナリストが揃って東北地方の農業地帯を取材、棚田をはじめとする日本の水田農業に感動し、驚く姿がいたるところで見られた。単に「食料」としてだけでは置き換えられない、日本人の生活や文化にとってかけがえのない「コメ」へのこだわりとコメを中心にはぐくまれてきた文化に多くの記者が関心を示した。

アジアで初めて開かれる世界大会のテーマは「瑞穂の国を探検しよう」。畑作、畜産が中心である欧米のジャーナリストたちに、稲作を中心とするアジアの農業、その典型として日本の農村をたっぷりと取材してもらい、より広い視点から世界の農業、食糧

問題を考え、発信する一助になればと願った。大会前半は、東京の食肉市場や青果物の流通センターなどを早朝から精力的に取材したが、後半の東北取材への関心は高かった。

東北地方の取材は古川農業試験場、パールライス宮城精米工場から始まった。200名近くの外国人が修学旅行のように新幹線で東京から古川へ移動する様子は壮観であったが、この集団が東北の農村地帯を訪ね、取材する姿もまた、行く先々で大いに話題となった。古川農業試験場では、大会にあわせて水を張った田を用意し、手植え、乗用田植え機そして最新式のGPSを搭載した無人自動田植え機と3様の田植えの実演が披露され、日本の田植え技術の進歩を取材した。翌日から1泊2日の農村取材は大会のメインイベントである。宮城県を中心に、岩手県、山形県にまたがる3つの取材コースにはどのコースにも取材先に稲作農家、酪農・肉牛農場そして酒蔵を配置した。水田を中心とした日本の農業、生活に根ざした伝統と文化を海外ジャーナリストに真正面からとらえてほしいとの考えがあつてのことである。

コメどころ東北は、どこに行っても収穫を間近にひかえこがね色の田んぼが広がる。棚田、有機栽培米、環境保全米の生産、それぞれのコースで形態の異なる生産者を取材したが、どのコースでも参加者はコメ作りへのこだわりと伝統を守るために農民が持つ「プロ意識」に共感していた。参加した記者からは「日本の稲作はフランスのブドウ作りのようだ。」という

例えがあった。フランスでもワインは生産過剰だけれど、あまりに生活に密着して生産者はブドウ作りをやめられない。そんなところが日本のコメ農家と同じような状況にあるということだろう。酪農現場では家畜保護の取り組みの遅れに嘆息し、肉牛農家では和牛の本質を知ろうと熱心に質問する記者の姿が印象深い。畜産農家でワラの利用や日本酒造りに欠かせないコメへのこだわりなどを取材するにつれて、地域の伝統文化がコメ作りとともに培われてきたことを知るようになる。

食料自給率40%を切っている国で、生産が需要を大きく上回る構造になっているのにコメにこだわり、飼料を数千キロも離れた国から輸入している。彼らを感じた「矛盾」はそのまま今の日本農業の抱える矛盾そのものである。一方では伝統としてのコメ作

りは守り続けるべきだという意見も大勢をしめた。これまでの国際的な食料・農業論議で、日本のこうした農業事情はどれほど正確に反映されてきたのだろうか。各国のジャーナリストの取材ぶりを見ながら、筆者はそういう思いを強めた。



書籍紹介

早田清美写真集

せんじょう

「千町棚田50年 1955/2005」

中島 峰広

本書は、30年間南海放送の報道部カメラマンとして活躍した著者が述べているように、美しい棚田の写真集ではなく、1955年と半世紀後の2005年における棚田の農作業と経営環境が如何に変化したかを示した記録写真集である。

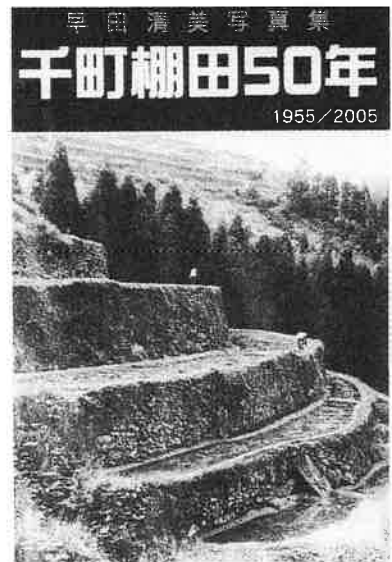
1955年当時の写真は、モノクロであることでもむしろ画面に迫力が増し、ひたすら人力にのみ頼っていた農民の働く姿が活写されている。牛を使い代掻きをする人、その後をトンボのような道具を使って均す人、鍬で上手に畦を塗り上げる人、苗代田で苗を取る人、その苗を竹籠に入れ天秤棒で担ぎ運ぶ人、ころがし（定規）を前に置き後退しながら数人で田植えをする人びとなど、高度経済成長期以前の農村ならばどこでもみられた光景である。稲藁を担いで急な坂道を下る老人や主婦、兄弟らしい小学生、薪を担ぐ少女などの画像は、当時家族全員が働かなければ暮らしが成り立たなかったことを示しているとともに、山里に人の声が溢れ活気があったことが感じ取られる。

これに対して、2005年のカラー写真は、50年間の変化の大きさが写し出されている。棚田地域では、乗用の小型トラクターや歩行型2条田植機が活躍、3面コンクリート張り水路のなかを黒色のゴムホースが走り回り、畦畔はコンクリートに変わっている。すべてのものが進歩したように見える。しかし、働いている人は疎らで老人ばかり、耕作されている水田の背後には放棄された棚田の草藪が広がり、廃屋さえみられる。町から来た孫と思われる子供たちの遊ぶ姿はあっても農作業を手伝う姿はなく、日常のひっそりとした淋しい暮らしが伝わってくる。

これらの舞台になった千町棚田は、西条市の市街地背後に迫る主峰石鎚山からなる四国山地を分け入ったところにある。市街地から車で加茂川、その支流谷川沿いに走る国道194号を高知県の町へ向かい、30分ほどで到着する。四国山中、交通量の少ない国道沿いの、しかも道

より高いところにあるため、これまで知る人が少なかったであろう。標高1,112mの櫛ヶ峰の山麓120～480mの高度差360m、傾斜3分の1の斜面に拓かれている棚田で、早田さんに現地を案内して戴いたが、壮大な規模。スレート状の結晶片岩を丁寧に平積みや谷積みした石積みの棚田である。面積60ha、現在の耕作面積はその10%程度の6haにすぎないが、かつてすべてが耕作されていた時代、平均2haの段高とすると180段の棚田がみられたことになる。私が知るかぎり、現存する棚田のなかで、連続して最も段数が多いのは134段の福岡県星野村広内の棚田であることから、まさに日本一の規模といえるものであり、壮観であつただろうと想像される。

本書は、過去50年間におこった棚田地域の激変した姿を明らかにしただけでなく、知られなかった棚田に光を当て、日本全土に千町の名を広めたことにより、その価値を一層高めた写真集であるといわなければならない。



事務局ニュース

◆ 棚田学会賞基金募金者の紹介・募金のお願い

初代会長の故石井進先生の遺徳を偲び、棚田保全に資する優れた業績を表彰するために、「石井進記念棚田学会賞」を2004（平成16）年8月に設けました。そして棚田学会賞が、全国の棚田保全活動を進める上での力強い応援となるよう、毎年公募し、厳正な審査の上これまでに3回、8団体・1個人へ賞を授与して参りました。

その後2005年8月、学会賞の円滑な運営をはかるために、受賞にかかる費用として「棚田学会賞基金」を設立し、会員の皆様から寄せられた募金総額は、610,000円（2007年10月末日現在）となりました。募金をお寄せ下さいました皆さまをここにご紹介し、通信紙面をお借りしてお礼とさせていただきます。

青柳健二・青山淳二・荒木恵美・石塚克彦・板津洋吉・伊東春海・上野裕治・牛島正美・海老澤衷・大山千枚田保存会・河合哲玄・河原壽・神田三亀男・岸康彦・栗田道代・河野了・笹川廣明・佐藤寛・下川勝三・白井圭子・杉山恵一・杉山行男・千賀裕太郎・高野武男・高橋久代・田中哲二・棚田容夫・柘植弘成・寺内幾三郎・中島峰広・永井義瑩・中川昭一郎・中島宝城・永田博義・羽田孜・服部英雄・原田津・春山成子・平井茂・ひらつか順子・平野馨・弘中征男・福満敏博・堀田和裕・堀田恭子・真島俊一・水谷正一・嶺隆二・元木靖・森公夫・守末道代・安井一臣・柳沢幸也・山本一・吉田忠文

（敬称略、アイウエオ順）

なお、募金は随時受け付けておりますので、ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

1. 募金額 1口5,000円（1口以上）
2. 募金方法 郵便振替用紙に「棚田学会賞基金」とご記入の上ご送金下さい。

■口座番号 00150-2-125247 ■加入者名 棚田学会

◆ 棚田学会誌9号への投稿、棚田学会賞募集について

棚田学会誌9号（2008（平成20）年7月末発行）への投稿、2007（平成19）年度棚田学会賞への応募を受け付けております。学会誌投稿、棚田学会賞の応募については、それぞれ同封の「棚田学会誌投稿規定」、「石井進記念棚田学会賞候補者の公募について〈応募手続き〉」等をご覧ください、ふるってご応募下さい。

第15回 棚田学会談話会のご案内

日 時 2007年12月8日（土） 15:00～（受付：14:30～）
 会 場 早稲田大学文学部 36号館 6階 682号室
 演 題 「激変 食の環境、海上運賃の高騰など」
 ー元商社マンの視点から 最近の食品値上げラッシュの背景をみるー
 講 師 高木宏明（元三井物産食糧部門穀物部長）
 （詳しくは別紙ご案内をご覧ください。）

事務局ニュース

1. 平成 19 年度活動計画

1. 棚田学会大会 1回 (平成 19 年度大会:平成 19 年 8 月 5 日開催)
2. 理事会 7回 (平成 19 年 7 月 21 日開催済み、臨時開催含む)
3. 研究会・談話会・見学会
9 月 15 日(土)、16 日(月) 重要文化的景観の指定を目指す長野県千曲市「姨捨棚田」
10 月 13 日(土) 談話会及び若手研究発表会
4. 棚田学会誌『日本の原風景・棚田』(第 9 号)
5. 棚田学会通信 (第 23, 24, 25 号)
6. 棚田学会賞の応募及び選定

2. 平成 19 年度予算 (平成 19 年 7 月 1 日～平成 20 年 6 月 30 日)

1) 一般会計

収入の部		支出の部	
事項	予算額	事項	予算額
会費収入	1,780,000	旅費	150,000
普通会员 400 名×4,000 円	1,600,000	講師旅費	80,000
学生会員 10 名×2,000 円	20,000	連絡旅費	70,000
賛助会員 16 名×10,000 円	160,000	謝金	50,000
図書販売	100,000	印刷費	1,420,000
前年度繰越金	2,089,541	会誌第 8 号 (B5、106 頁)	1,100,000
		学会通信 60,000 円×3 回	180,000
		大会資料等	140,000
		通信・郵送費	400,000
		会誌発送費 (第 8 号)	50,000
		学会通信発送費 (23,24,25 号)	150,000
		郵送費	50,000
		通信費 (電話, FAX, 切手代等)	150,000
		ホームページ運行費	50,000
		会議費	200,000
		理事会、編集会議他	200,000
		会場設営費	250,000
		大会	150,000
		談話会	100,000
		棚田学会賞基金へ	150,000
		消耗品費	49,541
		予備費	1,250,000
合計	3,969,541	合計	3,969,541

2) 特別会計

収入の部		支出の部	
事項	予算額	事項	予算額
棚田学会賞基金募集予定	200,000	棚田学会賞	35,000
一般会計より	150,000	賞状、盾製作費	35,000
前年度繰越金	362,447	旅費交通費	200,000
		次年度繰越金	477,447
合計	712,447	合計	712,447

編集後記：朝食はパン党？ご飯党？5人(全員女性)中2人がパン、2人がご飯、1人がヨーグルト程度という具合で、2対2の引き分け。泊まった宿の朝食はご飯。パン党もご飯を「おかわり」。私はホッとしました。パン党になった理由は、「簡単」、「習慣」。働く女性は忙しく、食事の準備も片付けも簡単に済ませたいのが人情。40～50代の女性の生活習慣がコメの消費に大きく影響していると確信した瞬間でした。(T)